

フランス学士院



千代田線を乃木坂で降り、階段を登りながら考えた。学術会議は近くで便利だ。雨が降ってもすぐ駆け込める。文句はないはずなのに何か物足りない。何だろう？

まだ結構寒い1月、パリのフランス科学アカデミーでIAP（インターアカデミーパネル）の運営委員会が開かれ、IAP2000のホスト国として佐々木副会長と筆者が参加した。有名なアカデミー・フ

ランセーズをはじめとして、科学アカデミーを含む五つのアカデミーがフランス学士院（Institut de France）の建物に同居しているが、筆者のポケットカメラでは、その建物全景を収めるのに5枚のショットを継ぎはざしなけりななかつた。

ルーブル美術館からセーヌ川越しに対岸を眺めると、この壮大な建物が必ず目に入るはずである。正面中央のチャペルに向かって、ルーブル側から立派な歩道橋が架かっている。話によると、この建物はもともと地方貴族の子弟を養育する学校として1667年に完成したものであるが、当時ルーブル宮殿に住んでいたルイ14世が、学生の勉強ぶりを不意打ちにチェックするため専用橋を造らせたという。のちになって、現在では芸術橋（Pont de Arts）と呼ばれている装飾性豊かな橋に架け替えられた。何かにお金を使ったら、その評価のためにもお金を使う。我々も科学技術の推進に莫大な予算を使っているから、きちんとした評価にもお金を惜しんではならないと、ルイ14世は教えている。

筆者が学術会議にくるたびに何か物足りなく思うようになったのは、どうもフランス学士院に行ってきたかららしい。建物は実用だけではない。文化が必要なのだ。

第5部部长 大橋秀雄